

サウンドスケープと地理学者

— 景観と風景に関する一考察 —

湯山健一

Abstract

‘Soundscape’ is a word created by the Canadian composer, Raymond Murray Schafer (1933-) in the 1960s, obviously based on the word ‘landscape’. Since then, the word has caught on and the concept has been studied in various kinds of academic fields such as musicology, acoustics, architecture, sociology, geography, and so on. It is also used in our daily lives concerning problems to do with the auditory environment. In Schafer’s original idea, ‘soundscape’ was not really an object around us, but a ‘heard’ environment, which implies the subjectivity of a human agent. But it has often confused researchers, especially geographers, who in most cases have considered landscape as objective reality. The discussion continues, with some saying soundscape is an environment and others saying it always includes our way of hearing the sound. On the other hand, in the current trend in landscape studies in Japan, as an interdisciplinary field, ‘landscape’ (*keikan*) is clearly understood as an object while ‘view’ (*fûkei*) is seen as a more subjective interpretation. This could give good suggestion to Japanese geographers if they would like to contribute more to the activities and studies of the Soundscape Association of Japan: a new step in terminology needs to be taken first, making a clear distinction between ‘soundscape’ as an object and, say, ‘sonic view’, which can imply our way of hearing. Of course, it is not simply a problem of terminology but also one of philosophy itself. Further discussion seems to be required to establish the philosophy of soundscape.

Key words: soundscape, Soundscape Association of Japan, landscape, geography, landscape studies

I はじめに

「サウンドスケープ (soundscape)」という語がわが国で広く用いられるようになっておよそ20年になる。その間、日本サウンドスケープ協会（以下 SAJ）の設立とその活発な活動の甲斐あって、「日本の音風景100選」をはじめ各種放送番組、各地でのサウンド・マップ製作など、空間に溢れる音に着目した諸活動が実践され、また数多くの研究成果が蓄積されてきた¹。

その一方で依然として気懸かりなのが、そもそも「サウンドスケープ」とは何なのかという根本的な問題がもしかすると曖昧なまま残されているのではないかということである。否、そのようなことなどとうに解決済みだと言われる向きもあるかも知れない。確かに、周知の通り SAJ が設立される際にもこの語にどのような訳語を当てるのがふさわしいかという問題について議論が交わされたことはあったし、またこれをどのように定義づけるのかという問題に関しては、設立趣意書にも示された「サウンドスケープ=音の風景」ということで一応の決着を見ている²。

それでも尚ここでこの語およびこの概念の再考を促すような問題提起をしているのには相応の理由がある。それは一言で言うなら、解釈のズレを抱えていながら分かり合えていると思いついでいるために、進むはずの議論が膠着してしまっているのではないかという釈然としない思いである。より具体的に言うと、例えば、「サウンドスケープ」を「音風景」と紹介する人もいれば、「音の景観」、「音環境」などと形容する人もいるが、果たしてこれらは同じものなのかという疑念である。地理学者の末輩である筆者にとって、「風景」、「景観」、「環境」は、「空間」や「場所」と並んで地理学には欠くことの出来ない概念であり、各々異なる意味合いで用いられる語である。また別の例では、[NARO] 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構が2006年から開発を進めてきた「農村地域におけるサウンドスケープを収集・整理する地理情報システム」³のなかでの「サウンドスケープ」とは、「景域音」

なのだという。この語もまた前掲各語とは異なる意味合いで用いられているようであるが、これらすべてを果たして「サウンドスケープ」と一括りに論じて良いのであろうか。

このように、「サウンドスケープ」という語を用いた数々の研究や実践が積み重ねられてきている一方で、この語の解釈は多様性を帯びてきており、決してアプリオリなものとは言えない状況に至っている。無論、同じ語であっても、特定の学界内での用法と一般へ向けられた場合とで意味が異なるということも無いわけではあるまい。しかし、そうであるなら尚更、どこかで再整理を行う機会が必要と言えるのではないか。そしてこれは、SAJを「学会」とはせず「協会」という形態にしている趣旨とも密に関わっていると思えるのである⁴。

そこで本稿では、「サウンドスケープ」という語の原点に立ち返り、誕生以来この言葉がSAJを中心にどのような意味合いで用いられてきたのか、人間を取り巻く環境をその研究対象とする学問分野である地理学の「音」に対する向き合い方と対比しながら検討を行う。筆者も発起人のひとりに名を連ねた1993年のSAJ設立から早16年余が経過した時点で改めてこの語の捉え方を問い直してみるのには、協会の発展のみならず、我々自身が「音」に対する意識の向け方を再確認するためにも有意義なことではなかろうか。

II サウンドスケープという「景観」

「サウンドスケープ」という語は、周知の通りカナダの作曲家、マリー・シェーファー (Raymond Murray Schafer, 1933-) が「音」を表す‘sound’と「…の風景」を示す‘-scape’を接合した造語である。彼がこの語を用い始めたのは1960年代のことで、ときはまさにロックンロール全盛期からビートルズ旋風へと大衆音楽が活況を呈し、クラシック音楽の作曲家たちも多種多様な「音」や、奇をてらった聴覚作品の制作に関心を向けるようになった時代であったが、シェーファーにとってこれはあくまでも環境問題に強い関

心を寄せた新たな音楽作りと音楽教育の立場からの構想なのであった。彼のこの考え方は、近代化のもたらす弊害としての騒音公害を問題視するところに起因しており、これに対する社会の関心の高まりにも乗じて、主著『世界の調律』⁵などを通じて広く受け入れられ、今やこの語は *OED* をはじめ、数多くの辞書にも掲載されるものとなっている⁶。

さて、聴覚環境の素とも言うべき ‘sound’ について疑念を挟む余地はないであろうが、他方の ‘-scape’ とは果たして何を指すものであろうか。これを発想の元としたとシェーファー自身の挙げている語が、言わずもがなであるが ‘landscape’ である。彼は、2006年、来日時のある講演で次のように語っている。

「サウンドスケープ (音の風景)」という言葉は、「ランドスケープ (風景)」という言葉から生み出したものです。「ランドスケープ」という言葉も昔はありませんでした。イタリアの詩人のペトラが、山の上へ登って下界を見渡しときに「ランドスケープ」という言葉が生まれたのです。もとはイタリア語でしたが、彼が「ランドスケープ」という言葉を生み出した後になって、私たちは「ランドスケープ」という概念を持つようになったのです。画家は風景画を描くようになりました。建築家は、風景をデザインするようになりました。「サウンドスケープ」にも同じことが言えます。それまでは、音の環境のことを表す適切な言葉がなかったのです。だから、私は、我々の生活のなかにあるすべての音を表す言葉として、「サウンドスケープ」という言葉を生み出したのです⁷。

ここに訳出された「ペトラ」とは、おそらく中世イタリアの人文主義者であり詩人であったペトラルカ (Francesco Petrarca, 1304-74) のことであろうと思われるが⁸、‘landscape’ という観念がオランダ語を経由して英語の中に取り込まれたのは、*OED* 第二版および『ジーニアス英和大辞典』によれば16世紀のことで、「風景画 (法)」を表すオランダ語 ‘landschap’ を直接の語源とするようである。本来 ‘-schap’ は「技能」を表す ‘-ship’ に相当す

るものであったが、英語への借入以降、これの転じた‘-scape’は「…の風景」の意に変化したのだという。

他方、「風景」を表す語としては‘scenery’も想起されるが、同大辞典によれば、こちらはラテン語からイタリア語の‘scenerio’を経由して、「眺め」や「景色」を意味する‘scene’に「…に関係するもの」の意である‘-ery’を接合したかたちで18世紀に英語の中へ取り込まれている。

両者の語義をやはり同大辞典で確認してみると、前者の‘landscape’には、「1（ひと目で見渡せる陸地の）景色、風景、地形；[美術] 風景画；[通例単数形で] 風景画法 2 地形 3 展望、見通し 4 分野、領域、…界 [社会]；特徴 5 [コンピュータ] ランドスケープ、横長《横長の表示；その画面》」、後者の‘scenery’には、「1（通例美しい）[地方などの] 風景、景色、景観 [in] 《・scenes の集合体》 2 舞台装置、背景（幕）」とあり、派生的な意味の広がりには差異を認めることが出来るが、根本的な部分に大差はないと言って良い。Thesaurus を紐解けば互いの類語として双方が第一に上がる点など指摘しておけば充分であろう。

瓜田澄夫によれば、この二語が定着するまで、「風景」を表す英語は‘prospect’というやはりラテン語系の語彙が「風景」を表す唯一の一般的な語であったのだという。また、古代ギリシア語やラテン語には「風景」を表す言葉はなく、それに一番近い語彙は、「眺め、眺望」を表す‘prospectus’であった⁹。近代は人々に俯瞰の視線をもたらし、その結果として新語の定着が促されたということであろう。

かくして、近代以降「風景、景色」の意で広く用いられるようになった両語のうち‘landscape’に準えて‘soundscape’という語は生み出され、‘landscape’を長らくその研究対象としてきた地理学もまた自ずと‘soundscape’に関心を向けることとなったわけであるが、ここで問題としておかなければならないのが、地理学では通常‘landscape’という語に「景観」という訳語を当ててきたという事実である。この語は一般に馴染みのあ

るものではなく、耳にすることがあっても「景観論争」程度の言い回しに限られているため具体的なイメージを掴みにくいものであるうし、そもそも先掲の語意を眺めても‘scenery’の方にしか「景観」は含まれていない。「風景」や「景色」と「景観」の間に如何ほどの差が認められるのか。些末な事柄に思えるかも知れないが、ここには重要な問題が横たわっている。

明治期以降、ヨーロッパから導入された近代地理学の主流はドイツ語圏のそれであった。「景観学 (Landschaftskunde)」に由来する‘Landschaft’はまさに地理学の研究対象であり、これに当時の研究者たちは「景観」という訳語を当て、後には英語の‘landscape’もこれに該当するものと認知されるようになった。こうして地理学者にとって「景観」は「行為主体」の外に現前する客体として認識されることとなり、一般的な語である「風景」や「景色」とは区別が為されたのである。では、地理学者にとって「サウンドスケープ」は「音 (の) 景観」なのであろうか。以下に、日本の地理学における動向を窺わせる興味深い例をひとつ挙げておきたい。

2007年3月11日、聖心女子大学で「サウンドスケープと地理」と題されたSAJの例会が開催された。テーマは三本立てで、まずは協会から鳥越けい子の「東京タワーの眺めを聴く」(テーマ1)と題された報告が行われ、続いて、音の地理教育研究会の報告を皮切りとして合計9組の報告から構成された「地理教育と音・サウンドスケープ」(テーマ2)、そして、名古屋女子大学の小林田鶴子およびブンテック NPO グループ代表の西村昌子による「小学校の音楽、総合的な学習の時間における実践教材「音ワンダーランド」の紹介」(テーマ3)が行われた。このうち地理学者の側から報告が為されたのが二番目のテーマで、群馬大学の山口幸男、大妻中学高等学校の寺尾隆雄、国学院大学久我山中学高等学校の八田二三一、十文字中学高等学校の近藤敬、そして目白学園中学高等学校の西木敏夫と高橋洋明という、社会科教育、なかでも地理教育に携わる方々からの報告ということになった。項目は以下の通りである。

テーマ2：地理教育と音・サウンドスケープ

発表者：音の地理教育研究会（日本地理教育学会有志）

- | | | |
|---|-------------------------|---------------------|
| 1 | 地理教育と音教材 | 山口 幸男 |
| 2 | 音・サウンドスケープ教材に関する教材資料の収集 | 寺尾 隆雄 |
| 3 | サウンドスケープ教材に関するフィールドワーク | 八田二三一 |
| 4 | 音の地図化ーリアルサウンドマップー | 近藤 敬 |
| 5 | 音・サウンドスケープを取り入れた地理授業の実践 | |
| | (1) 中学校地理における実践（その1） | |
| | ー群馬のサウンドスケープー | 山口 幸男 |
| | (2) 中学校地理における実践（その2） | |
| | ー沖縄県のサウンドスケープー | 八田二三一 |
| | (3) 高等学校地理における実践 | 西木 敏夫 |
| | (4) 歴史の授業における実践 | 寺尾 隆雄 |
| | (5) 公民の授業における実践 | 高橋 洋明 ¹⁰ |

個々の発表に関する詳細はここでは割愛するが、何れの発表も音と環境に関する研究と教育の場における実践の具体例が示された非常に興味深いものであった。このように「サウンドスケープ」という概念や「音環境」に対する関心は、地理学においては今日主として教育の分野で受容され研究が深められているし、これはある意味で、我々を取り巻く音への「気づき」を訴えるシェーファーの啓蒙的な思想の一端が順当に継承された表れと見てよいと思われるが、何しろ気がかりなのは、地理学者の扱う音に纏わる議論のなかに「景観」の語が用いられることはなかったという点である。

地理学とSAJとの接点はこれに先立つ2002年10月と2003年5月の日本地

理教育学会例会で音の問題が取り上げられるなど、決してこれが初めてというわけではない¹¹。ただ、この例会においても繰り返し語られたのは、「地理学の立場からはサウンドスケープを「音環境」と捉えている」との言であった。つまり、ここに示された「サウンドスケープ」は何れも客体として現前する音の「環境」なのであって、行為主体とは切り離された対象である。果たして、「サウンドスケープ」研究が重きを置いていたのは寧ろ感性の問題ではなかったであろうか。人々の「見方」や「聞き方」の問題はどのようにこれと絡んでいるのであろうか。

Ⅲ 地理学とサウンドスケープ

伝統的に地理学がその研究対象のひとつに「景観」を据えてきたことはすでに述べたとおりである。にもかかわらず、その語幹に「景観 (landscape)」が見えている「サウンドスケープ」を、地理学者はなぜ音の「景観」ではなく「環境」と捉えているのであろうか。まずはこの「景観」を地理学者がどのように捉えてきたかという経緯をもう少し詳しく確認しなければなるまい。

重要な概念であればあるだけと言うべきか、実のところこの語の規定はなかなか容易ではない。例えば、『人文地理学辞典』¹²に「景観」の項は無く、「景観進化」、「景観地理学」、「景観変遷史」、「景観要素」、「景観類型」、「景観論」の各項のなかに、「景観はドイツ語の *Landschaft* に対して、植物学者の三好博士が与えた名称である。・・・正確な定義は未だ決定して居るとは言えないが、大体に於て眼に映ずる景色の特性と考えて差支えない¹³という辻村太郎の言や、「*Landschaft* (「景観」)とは地表の一部(断片)であり、あらゆる性質(特色)によって単元(統一体)として周囲のものから区別されると認識できる場合にのみ、景観と呼ぶことができる¹⁴とするシュミットヒューゼンらの見解などが取り上げられているに過ぎない。無論、これらのなかから、「景観」とは、「地表の任意の大きさの断片であり、多くのもので充填されている対象物」ということを読み取ることは出来ようが、項目としての定

義づけはない。

他方の「環境」は一般にも広く用いられる語である。『広辞苑』第六版によると「(1) めぐり囲む区域。(2) 四囲の外界。周囲の事物。特に、人間または生物をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界。自然的環境と社会的環境とがある。」とあり、行為主体とこれを「取り巻く」という関係は明白である。これは、『人文地理学辞典』にある「環境」への定義づけ、「人間(主体)を取り巻く外界を意味するものであり、主体があつて初めて成立する概念であろう」というものと何らかけ離れたものではない。英語でこの語に対応するのは、‘environment’、‘circumstance’、‘surroundings’などであろうが、これらの語にも日本語の「環」と同様、‘environ-’、‘circ-’、‘surround-’といった接頭辞があつて、「行為主体を取り囲んでいるもの」という理解が容易である。ドイツ語の‘Umwelt’の場合も同様であろう。つまり、これらは何れも行為主体と「向かい合う」という二元論的な概念を明示していて、これが研究の「対象」となり得る客体であることは明らかである。更に言うならば、「環境」という語のなかに「主観」の入り込む余地はないのであり、「環境」と「主観」が関係するのは、「環境」が客体として知覚された後の認知の仕方においてということになる。

ならば、音の「景観」と「環境」の間には如何ほどの差があるのか。やはりここには、「景観」という語のもつ曖昧さが絡んでいる。試みに同じく『広辞苑』を紐解いてみれば、「景観」とは「(1) 風景外観。けしき。ながめ。また、その美しさ。「雄大な—」(2) 自然と人間界のこととが入りまじっている現実のさま。」とあつて、その存在論的・認識論的な位置づけは曖昧模糊としていることがわかる。前述の通り、日常生活における使用頻度の低さがその理由のひとつとして指摘できようが、これが目の前にあつて認識され得るものであるのか、対象に向けられた認識主体の「捉え方」を含意したものであるのか極めて不明瞭で、地理学にとっての「景観」とはどうやら異なっているようである。

因みにその第一義として挙がっている「風景」は『人文地理学辞典』に項としての掲載はなく、『広辞苑』には、「(1) けしき。風光。(2) その場の情景。「入学式-」(3) 風姿。風采。人の様子。」「景色」は「(1) 山水などのおもむき、ながめ。風景。けいしょく。「すばらしい-」(2) 茶道具鑑賞上の見所。陶器の釉うわぐすりの色合い・なだれ・窯変などの趣。」とあって、これでは「景観」との間に大きな差を見出すことは出来ない。すなわち、一般的な用法における「景観」は、「風景」や「景色」同様、明確に行為主体から切り離された対象とは言い難く、対象への「見方」を含意しているようにも見える。このような文脈からすると、地理学に限らず研究者が科学の明晰さを際立たせようとすればするほど「景観」ではなく「環境」を用いる傾向があっても何ら不思議はないと言い得るであろう。

都市計画や緑地計画などにおいて主に用いられる先掲の「景域」も「環境」と同様、多くの場合は行為主体が「これからより良い状態へと改変していく空間的な対象物」を指している。「空間的な広がり」を表す「景」と「地理的な範囲」を示す「域」を組み合わせたこの語の指示内容は明確で、こうした限定的な用い方には適していると言うことが出来るであろう。したがって、冒頭に例示した「景域音」などといった用い方は、誤解を招きにくい、極めてわかりやすい表現と言うことが出来る。

かくして、もしも「風景」や「景色」と大差ないものとして「景観」すなわち‘landscape’を捉えるのだとすれば、何れも客体としてある聴覚環境を指す「音環境」や「景域音」は、‘landscape’から発想された‘soundscape’とは異なるものということになる。地理学のかなかにこの概念を初めて導入したイギリスの地理学者、ポコック (Douglas Pocock) の言にこの考え方の齟齬はないと言えるであろう。

サウンドスケープは、サウンドフィールドとはっきり区別されている。
サウンドフィールドは、聞き手ではなく音源の聴覚環境である。つまり、

感覚ではなく、音源がフィールドの中心となる¹⁵。

これに従えば、「音環境」や「景域音」は‘sound field’の側にあるのであって‘soundscape’ではないということになる。さらに、この差異化から読み取ることが出来るのは、地理学者であるポコック自身が‘landscape’を純然たる客体として取り扱っていないという事実である。地理学者にとっての「景観」は客体ではなかったのであろうか。

前掲の『人文地理学辞典』同様『オックスフォード地理学辞典』にも「景観」や「風景」の項は設けられていないが、原語の‘landscape’に「土地景観」という訳語を当てた項目立ては為されており、次のような定義が与えられている。

「地域、地域の外観、または、その外観を作り出す対象の集まりのこと。C・サウアーが、1925年に地理学において初めてこの用語を用いた。彼は、景観という概念は人間とその環境の相互作用の現れであると主張した。→図像学」¹⁶。

実のところ、わが国の地理学のなかでも「景観」の概念はこの導入元である欧米諸国の研究動向に伴って揺れ動いてきたのである。アメリカの文化地理学者カール・サウアー (Carl O. Sauer) にとって、「景観」とは、自然景観や文化景観といった地理学者の取り扱う対象であったけれど¹⁷、同じ頃のドイツでは、ゲシュタルトという観念を導入した「景観」に主体の「見方」の反映を見る新たな論¹⁸が唱えられており、これは、考えようによっては日本語の「景観」の一般的な意味合いに寄り添っていて、ともすれば「風景」や「景色」と大差ないものというところへ落ち着いてしまうようでもあった。

大戦を挟んだ1960年代になると、アメリカから始まった「計量革命 (quantitative revolution)」の波が、地理学から主観的要素を捨象する動きを見せ始めるが¹⁹、他方ではマズロー (Abraham Harold Maslow) の

人間性心理学²⁰やシュッツ (Alfred Schutz) の現象学的社会学²¹などが示した、人間を中心に据えた社会科学の方法論は徐々に地理学に影響を与え始め、所謂「ヒューマニスティック地理学 (humanistic geography)」による異議申し立てが計量的手法に対する見直しの契機をもたらした。かくして、「空間」と「場所」の捉え方に関する議論は活発化し、今日にも脈々と引き継がれているし²²、1980年代に入ると、ダンカン (James S. Duncan) らによってサウアーの文化概念は誰でもない個人を中心に据えているとの批判²³が為されるようになり、コズグロヴ (Denis Cosgrove) やダニエルズ (Stephen Daniels) からは「景観」を特定の階級によるものの「見方」とする捉え方²⁴も提示されている。

かくして議論は尽きないものの、「風景」との差異化を図るべく、地理学では概して「地表の任意の大きさの断片」あるいは「地域、地域の外観」などといった「対象物」として「景観」を捉える向きが現状では大勢を占めることとなっている。

風景哲学の確立を目論む哲学者の木岡伸夫は、日本の地理学者が‘Landschaft (landscape)’の意味内容を「景観」の語で代表させている最大の理由を、「地理学的概念としての使用に耐える実証的な性格が、「景観」にのみ認められる、という判断であろう」とし、次のように論じる。

それは言い換えれば、「風景」という日常化した用語のもつ複雑多様な意味含蓄、ニュアンスの全幅を取り込み、専門用語として概念的に整理し再構成する作業を、断念したということにほかならない。「景観」の短い歴史に対し、「風景」には平安時代以来、日本人が育んできた心性と文化の長い歴史が伴っている。たしかに、そうした意味の古層を掘り起こしつつ、そこに現代的な学術用語としての装いを施す作業は、一朝一夕に片づくものではない。」²⁵。

すなわち、「風景」を主観的な意味における「現象」とするならば、他方の「景

観」はその対極における「客観的実在」²⁶ということになる。地理学はこうして「景観」を行為主体から切り離れたのだと木岡は論じているのである。

因みに、景観工学の分野では、「景観」という語を「その場の情景を表す工学的な比較的狭い概念」に使用し、「風景」という言葉を「歴史・文化等の要素を含むより広い概念」に使用しているのだという²⁷。これもまた両者の扱いにくさを象徴するような、どこかしら曖昧な区分と言わざるを得ないが、少なくとも前者には対象物というニュアンスを、後者には行為主体による価値判断や評価の入り込む余地を残していることは読み取ることが出来る。

詰まるところ、客体として外なるものとしてある「景観」が「風景」と相対化されるかたちで専門的な用語として特化されたけれど、これもまた依然として議論の余地があるために、「音（の）景観」という語を避け、日常的な用語としても客観的実在であることが明白である「環境」に音を冠した「音（の）環境」という言い回しによって表されるものが、少なくとも地理学のなかでは研究対象化することとなったと考えてよさそうである。

IV 感覚の地理学

「景観」という語自体がことさら「視覚」に限定したニュアンスを有している訳ではないが、おそらくは視覚が他の感覚に比して情報量を遙かに多く含んだものであるという知見から、景観研究は自ずと視覚を中心としたものとなったと考えられる。1970年代以降、トゥアン (Yi-Fu Tuan)²⁸ や、レルフ (Edward Relph)²⁹らの研究に代表されるように、ヒューマニスティック地理学のなかで「場所感覚 (sense of place)」の重要性が指摘されると同時に、視覚以外の感覚による空間知覚の問題にも焦点が当たようになった。無論、前述の通り、1920年代にサウアーが提唱した文化地理学は人間の五感に注目してはいたし、聴覚環境を取り扱う研究も無かったわけではないが³⁰、本格的な取り組みは、やはりシェーファーの『世界の調律』に触発さ

れた1970年代以降のことと言うべきであろう。

地理学のなかで「サウンドスケープ」研究に先鞭をつけたのは、1985年に発表された、マスティン (J. F. Mastin) との共著論文であるポコックの‘Soundscape’³¹ と言ってよかろう。彼はさらに、‘Sound and the geographer’³²などの論考によって地理学の視覚偏重に警鐘を鳴らし、他の感覚器官による知覚をも含めた景観把握の必要性を論じた。また、カナダの地理学者、ポータウス (J. Douglas Porteous) は、‘landscape’のさらなる派生語 ‘smellscape’ を創り上げて嗅覚環境について論じ³³、また詩人ジェラルド・マンリー・ホブキンズ (Gerald Manley Hopkins, 1844-1889) が初めて用いたと言われる ‘inscape’³⁴ を手がかりに ‘bodyscape’³⁵ や ‘deathscape’³⁶ などの新たな概念を生み出していった。

ヒューマニスティック地理学のこうした動向は、「景観」の「見方」あるいは「感じ方」に焦点を当てたものと言え、煎じ詰めれば、日本語で言うところの「風景」とは何かを問い直すようなものでもあった。

「風景」とは地理学者にとって厄介な概念である。人文地理学会の前会長である千田 稔がその編著『風景の事典』の序文に記している言葉はそのことを的確に伝えている。

…たとえば「風景」ということばを取り上げてみても、人によって思うことは異なるのです。それを近代地理学では「景観」ということばに閉じ込めようとしたことから、地理学の悲しい放浪が始まったのです³⁷。

だからといって、地理学が「風景」へ関心を払ってこなかったわけではない。例えば、『風景のなかの自然地理』³⁸のような書名は、自然景観の捉え方への導入を「風景」という言葉によって行っているし、『風景の世界：風景の見方・読み方・考え方』³⁹は、まさに風景解読の試みである。杉浦芳夫らの文学作品の風景を地理学的に読み解く試み⁴⁰や、「郷土」を核に据えた論考⁴¹において

も「風景」はその遡上に上っている。

このような際にしばしば参照されるのが、西田正憲の風景論である。木岡の論にも通じるところのある西田の風景論は、「風景とは、人間（主体）と対象（客体）との相互関係のなかに生まれるものである。」⁴²と明快なまでに「景観」と「風景」を切り分けている。これに従えば、「風景」は、個々の行為主体が対象としてある「景観」とどのような関係を築くことが出来るか、その「見方」をもたらすものである。外部者は初めて出会う「景観」に知悉する楽園を投影することすらある。明治期に欧米人によってもたらされたこうした動きこそ、西田の言う「意味の風景から西欧近代のもたらした視覚の風景への移行」ということなのであるが、これを聴覚環境に纏わる問題に援用すれば、「サウンドスケープ」は一層捉えやすいものになるのではなからうか。

紆余曲折を経て地理学には人間の「主観」を扱う領域が形成されていったものの、残念ながら「音」を対象とした研究が大きな潮流となることはなく、系統地理学の中でも「行動」や「知覚」を対象とした研究の一部と、前述の通り地理教育（広くは社会科教育）の分野において実践や研究が行われ続けているというのが現状である。行為主体にとっての「音環境」もしくは「聴覚環境」およびこれに付随する諸問題を対象とした言わば学際的研究分野であればこそ、他の学問分野との交流が期待されるところであるが、不思議なことこうした分野の研究に携わる研究者が必ずしも SAJ の活動と接点を有して来たとは限らない。なぜ両者の共同研究や共同のプロジェクトのようなものは活発化していかなかったのであろうか。

V サウンドスケープとは何か

SAJ には、設立以来様々な分野の研究者や、研究機関に身を置かずとも、あらゆる形で「音」に関心を持つ方々が会員として名を連ねている。しかし、会員名簿を見る限り、そのなかで「地理学」を掲げているのは筆者のみである。無論、サウンドスケープに関心を寄せることと会員であることとは別問

題であるが、少なくとも協会内で意見交換を行い、積極的に活動していこうと考えた地理学者はほとんどいなかったということになる。ここまで見てきた通り、地理学者が「音」に関心を払ってこなかったわけではないが、これがなぜ日本サウンドスケープ協会の活動と結びつかなかったのか。その理由は複数考えられるが、詰まるところ、「研究対象が似て非なるものと思えたから」ということになるのではなかろうか。

その一端を顕著に表しているのが、本稿で示した「サウンドスケープ」に対する解釈のズレと「サウンドスケープ」研究の解釈の多様性である。「サウンドスケープ」を論じる際、「音の風景」のように「音の」を冠されて用いられている言葉として「風景」、「景観」、「景色」、「環境」、「景域」などが混在しているのが実情と言ってよかろう。SAJはこれを事実上容認してきたわけであるが、地理学者にとってこれらの語の用法はすでに述べたとおり複雑な問題を孕むものであった。したがって、当初は「音(の)景観」、現状ではその多くが「音(の)環境」として「サウンドスケープ」を捉えている地理学者にとって、SAJの扱う対象は多岐に亘りすぎており、何かしら自分たちの研究とは違うことが行われていると捉えられた可能性がある。換言すれば、地理学者が問題にしてきたのは、従来視覚偏重の状態で行われてきた地理学研究の対象を聴覚環境にまで拡大する「気づき」に基づくものであったのであり、その先にある、例えば一部の「サウンドスケープ」研究に見られる「感性」の問題などは客観性を欠いているなどの理由から対象外とされたのである。

1980年代のヒューマニスティック地理学は、「サウンドスケープ」という言葉の導入によって、視覚的な「景観」のみならず聴覚環境に目を向け、さらには客体に対する認知を織り交ぜた主観の解釈をも包摂した研究の手法を提唱したはずであったが、「主観」を取り扱うことに伴う諸問題が、結局は対象の明確化を要請し、「サウンドスケープ」は「音環境」として客体化されてしまった。

他方、SAJは、設立当初から「音の風景」という表現を用いて、対象物としての「音環境」のみならず、「主観」を介した人間の感性に重きを置いた音全般をその研究対象と措定してきた。その結果、協会としてのあるいは会員の研究・調査には、計量的なものとうでないものが混在し、協会の目論見通り、様々な観点から我々を取り巻く「音」について議論し合うという状況が創り上げられている。しかし、ご多分に漏れず、非計量的な研究のなかには、ともすれば「これは科学なのか」という疑念を抱かせかねないものが紛れ込む危険性が常にある。このような点が地理学者には受け入れられ難かったのではなからうか。

「サウンドスケープ」は外なるものであるのか、内なるものであるのか。定義づけが曖昧なままに議論が為されても平行線を辿ってしまうことは自明である。ならば、例えば、「景観 (landscape)」に準えて、「音 (の) 景観」とこれを定訳化し、客観的実在と割り切った解釈に固定した方が良いのではなからうか。

例えば、筆者は共訳書『心のなかの景観』⁴³において、‘-scape’には一貫して「…景観」という訳語を当ててきたし、ここに「見方」や「感じ方」という意味合いを含めて共訳書では次のように論じても来た。

サウンドスケープは、聴取主体とサウンドフィールドとの「関係」において立ち現れるものであって、「外なるもの」ではない。サウンドフィールドは、主体によって意味を付与される以前の、音源から発生する「音の環境」である。外なる音は認識主体によって知覚され、主体はこれを意味づける。しかし、音の響き方やその感じ方は非常に流動的なもので、主体と音源の間であって定位することはない。ここに、サウンドスケープという相互浸透的な「関係」が生じるのである。つまり、サウンドスケープはあくまでも「関係構造」なのであり、サウンドフィールドのように物理的実体をもつものではない。

主体と環境の間に取り結ばれる、この「関係」の質を知ること。サウンドフィールドではなくサウンドスケープを取り扱う意義はここにこそ

存するのであり、これがひいては「場所」の感覚や趣を読み解く鍵となるのである⁴⁴。

これがシェーファーの本来意図したところであるという考え方に今も揺るぐところはないし、聞く主体と音との関係に着眼することの重要性については、編者の中川 真も、あるいは、「現代社会とサウンドスケープ」と題されたSAJの座談会で結城正美も繰り返し強調しているところである⁴⁵。

また、「音風景の記述・記録・測定の方法に関する一論考」のなかで土田義郎も「サウンドスケープは人が音をどのように聞いているのかが問題である」⁴⁶と記しており、「関係」を重視する観点もSAJにおいても広く共有されているものと思われる。しかし、例えば、この文脈における「サウンドスケープ」が何を意味しているのか、読者には共通の理解が形成されているのであろうか。ここにこそ問題の根は存するのである。

筆者が‘-scape’に「…景観」という訳語を当て、ここに「見方」という意味合いを含めてきたのは、地理学の慣例に倣ったためでもあり、またもとより本稿で論じてきたとおり、「景観」に「見方」が包摂され得るという意味合いでもあった。しかし、「景観」の解釈が一定しないのであれば、西田や木岡の風景論に準じてこれを行為主体から切り離し、客観的実在としてしまおう方があるいは「サウンドスケープ」自体の理解も容易になるのではなかろうか。

木岡に倣えば、「景観」は「型」、「風景」は「形」である。「景観」とは、「その成立に至る各主体の意識過程つまり主観性を捨象して、空間的に展開された場所のネットワークを、それ自体として記述対象とした場合の、その客観的内容」であり、この「型」から当該の場所に住みつく主体の「意識に映じた土地の主観的な様相」として「風景」は現れる⁴⁷。すなわち、サウンドスケープ研究が「関係性」を重視するのであれば、寧ろ歴史も長く示唆に富む「音(の)〈風景〉」という日本語によってこれを捉え、対応する英語に‘soundscape’

を「当てない」ことが得策ではないかと思われるのである。これは換言すれば、「サウンドスケープ」には「音（の）景観」を当て、客観的実在であることを明示するということである。

当然、「音（の）風景」には、例えば‘sonic scenery’や、「捉え方」に力点を置くなら‘sonic view’のような英語表記および概念を設けて「関係性」を強調することになる。これに伴って、例えば「聴覚環境」は、‘auditory environment’、「音環境」は‘sonic environment’、その範囲に限定的なニュアンスを持つ「景域音」を‘sound field’などに対応させれば、概念整理は容易になる。以上はあくまでも一例に過ぎないが、こうすれば、例えば「サウンドスケープの記録」という言い回しが、客体としての音の記録であって、聴取主体と音環境などとの「関係性」に関する記述でないことははっきりするであろうし、こうした問題が解消していけば、永幡幸司の「音響学者はみんなサウンドスケープ協会やめてっちゃうわけですよ。」⁴⁸という言葉に象徴されるような協会内のコミュニケーション不足を嘆く声も多少は緩和されるかも知れない。

このような考え方の転換には当然反論もあるであろう。なにしろシェーファー自身は、まさにこの「サウンドスケープ」という語によって「関係性」の重視を訴えていたのであるから⁴⁹。しかし、この語のもととなった「景観（landscape）」に纏わる種々の議論に惑わされ、それによって新たな研究の機会が設けられにくい状況が生み出されているのだとしたら、このような概念整理の仕方もあり得るはずであるし、寧ろその方が実はシェーファーの意図に沿うものになるかも知れないとも思えるのである。

VI むすびにかえて—サウンドスケープの新たな地平—

本稿の趣旨は、兎にも角にも一般の語彙との乖離を埋めて「サウンドスケープ」の理解をより容易なものとし、これに纏わる議論を活発化させたいということに尽きる。若手の地理学者のなかにはポップ・カルチャーやストーリー

ト・カルチャーといった若者文化を研究対象とした若手の地理学者も少なからずおり、社会学やポピュラー音楽研究などと関心を共有しているところもある。このような切り口からも、地理学者がサウンドスケープ研究に貢献できる部分は決して少なくないものと思われる。

SAJも地理学も、マリー・シェーファーから「音の風景」に着目することを学んだけれど、この辺りで概念整理を行い、さらに一步進んだところで「サウンドスケープ」研究の新たな地平を築き上げていく必要があるのではなからうか。無論、これまでに行われてきた諸々の研究成果を否定する気など毛頭ない。寧ろ、これまで様々な学問分野の立場から行われてきた数多くの研究を架け繋いでいくための言わば「サウンドスケープの哲学」こそ、求められているように思えるのである。

「景観」は西欧近代の産物であったかも知れない。しかし、「わが国には「近代的風景」に先行する「伝統的風景」があった」⁵⁰と西田は言う。中国には4世紀すでに山水画が描かれており、その後の日本はその文化圏にあった。西欧近代がもたらした「見方」以前の風景がそこにはあったのである。サウンドスケープの哲学にも「風土」の問題への接近が求められていると言えらう。

もしかすると「景観」に関する議論の動向次第では先の提言に変更を加えなければならないかも知れないが、何れにせよ、この先、風景論⁵¹の知見や、倫理学者、和辻哲郎からフランス人地理学者、ベルク (Augustine Berque)⁵²へと引き継がれ、木岡も大きな関心を払う「風土」という観点など参照しながら、「サウンドスケープの哲学」の構築にはさらなる検討が必要であると思われる。

註

- 1 平松幸三「総説：日本におけるサウンドスケープ研究」、『サウンドスケープ』10、2008、pp.1-8。

- 2 例えば、わが国にこの語を紹介した人物としても知られ、SAJ でも設立当初から中心的な役割を担っておられる鳥越けい子ですら、あるインタビューにおいて、この語が多様な形で解釈されていることに対する懸念を口にしてている。『サウンドスケープ』8、2006、pp.39-45参照。
- 3 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構ホームページなど参照。
(<http://www.naro.affrc.go.jp/top/seika/2006/nire/no06002.html>)
- 4 平松幸三ほか「特集：現代社会とサウンドスケープ 第1回座談会」、『サウンドスケープ』8、2006、pp.1-14。
- 5 シェーフター、R. M.、鳥越けい子他訳『世界の調律：サウンドスケープとは何か』東京、平凡社、1986。
- 6 *OED* 第二版 (1989年) XVI 巻 49 頁に、‘soundscape [SCAPE sb^θ] (a) a musical composition consisting of a texture of sounds; (b) the sounds which form an auditory environment’ とある。
- 7 岩宮眞一郎「マリー・シェーフター講演会イン福岡」『サウンドスケープ』9、2007年、61頁。
- 8 Petrarca, F., ‘The Ascent of Mount Ventoux’
(<http://www.fordham.edu/halsall/source/petrarch-ventoux.html>)
- 9 瓜田澄夫「ピクチャレスク美学における山岳表象について」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』3、2006年、93-105頁。
- 10 日本サウンドスケープ協会2006年度第2回例会 (<http://www.saj.gr.jp/events/reikai2006-2.html>)
- 11 山岸美穂「日本地理教育学会2002年10月例会 2003年5月例会 —サウンドスケープと地理学：地域学習とサウンドスケープのパースペクティヴ—」『サウンドスケープ』5、2003、pp.48-9；山口幸男ほか編『これが新しい地理授業の現場だ』東京、古今書院、2005年など参照。
- 12 山本正三ほか編『人文地理学辞典』東京、朝倉書店、2003年。
- 13 辻村太郎『景観地理学談話』京都、地人書館、1937。
- 14 Schumithusen, J. ‘Was ist eine Landschaft’ *Erdkundliches Wissen*, 9.
- 15 ポコック、D.「音と地理学者」(Pocock, D. & Porteous, J. D.、米田巖、瀧山健一編訳『心のなかの景観』東京、古今書院、1992年)、87頁。
- 16 Mayhew, S. 編、田辺裕監訳『オックスフォード地理学辞典』東京、朝倉書店、2003年。
- 17 久武哲也『文化地理学の系譜』京都、地人書房、2000年など参照。
- 18 山野正彦「景観の『相貌』と『ゲシュタルト』」『人文地理』42-2、1990年、50-71頁。

- 19 米田巖、潟山健一「人文主義地理学の新しい潮流：知のパトスへ向けて」『人文地理』1991年、36-55頁など参照。
- 20 Maslow, A. H., 小口忠彦監訳『人間性の心理学』神奈川、産業能率短期大学出版部、1971年。
- 21 Schutz, A., 森川真規雄、浜日出夫訳『現象学的社会学』東京、紀伊國屋書店、1980年。
- 22 荒山正彦ほか『空間から場所へ：地理学的想像力の探求』東京、古今書院、1998年など参照。
- 23 Duncan, J. S., 'The superorganic in American cultural geography', *Annals of the Association of American Geographers*, 70, 1980, pp.181-98.
- 24 Cosgrove, D. & Daniels, S., *The iconography of landscape: essays on the symbolic representation, design and use of past environments*, Cambridge UP, 1988. (千田稔、内田忠賢監訳『風景の図像学』京都、地人書房、2001年。)
- 25 木岡伸夫『風景の論理：沈黙から語りへ』京都、世界思想社、2007年、40頁。
- 26 木岡伸夫、同書、41頁。
- 27 木下元洋ほか「景観と音景観の構成要素を用いた風景の工学的分析手法の提案」、『サウンドスケープ』11-1、2009、pp.39-48.
- 28 Tuan, Y. F., 小野有五、阿部一共訳『トポフィリア：人間と環境』東京、せりか書房、1992年。
- 29 Relph, E., 高野岳彦ほか訳『場所の現象学：没場所性を超えて』東京、筑摩書房、1991年など参照。
- 30 Granö, J. G., 'Reinegeographie', *ActaGeographica*, 2, 1929, pp.1-202.
- 31 Pocock, D. & Mastin, J. F., 'Soundscape', *Journal of Architectural Planning Research*, 2, 1985, pp.169-86. (前掲15)『心のなかの景観』45-74頁。)
- 32 Pocock, D., 'Sound and the geographer', *Geography*, 74-3, 1989, pp.193-200. (前掲15)『心のなかの景観』75-84頁。)
- 33 Porteous, J. D., 'Smellscape', *Progress in Human Geography*, 9, 1985, pp.356-78. (前掲15)『心のなかの景観』111-52頁。)
- 34 Porteous, J. D., 'Inscape: landscape of the mind in the Canadian and Mexican novels of Malcolm Lowry', *Canadian Geographer*, 30, 1986, pp.123-31. (前掲15)『心のなかの景観』183-210頁。)
- 35 Porteous, J. D., 'Bodyscape: the body-language of metaphor', *Canadian Geographer*, 29, 1986, pp.2-12. (前掲15)『心のなかの景観』153-82頁。)
- 36 Porteous, J. D., 'Deathscape: Malcolm Lowry's topophobic view of the

- city', *Canadian Geographer*, 31, 1987, pp.34-43. (前掲15)『心のなかの景観』211-43頁。)
- 37 千田稔ほか『風景の事典』東京、古今書院、2001年。
- 38 杉谷隆ほか『風景のなかの自然地理』東京、古今書院、2007年。
- 39 菊池俊夫編著『風景の世界：風景の見方・読み方・考え方』東京、二宮書店、2004年。
- 40 杉浦芳夫編『文学 人 地域：越境する地理学』東京、古今書院、1995。
- 41 「郷土」研究会編『郷土：表象と実践』京都、嵯峨野書院、2003。
- 42 西田正憲『瀬戸内海の発見』東京、中公新書、1999年、28頁。
- 43 註15) 参照。
- 44 拙稿「民謡のトポスへ 南イングランド」中川真編著『小さな音風景へ：サウンドスケープ7つの旅』東京、時事通信社、1997年。
- 45 註4) 平松幸三ほか「特集：現代社会とサウンドスケープ 第1回座談会」；結城正美「〈風土〉の肉声—石牟礼道子『苦海浄土』のサウンドスケープ」、『サウンドスケープ』3、2001、pp.47-53；池村弘之「日本におけるサウンドスケープ論の可能性」*ANEMOS* 1、1991、31-7頁など参照。
- 46 土田義郎「音風景の記述・記録・測定の方法に関する一論考」、『サウンドスケープ』8、2006、pp.31-8。
- 47 木岡伸夫、前掲書、43-51頁。
- 48 大門信也ほか「特集：現代社会とサウンドスケープ 第2回座談会」、『サウンドスケープ』9、2007、pp.25-32。
- 49 平松幸三「風景としての音」(古川彰ほか編『環境イメージ論：人間環境の重層的風景』東京、弘文堂、1992年) 92-120頁；内田忠賢「サウンドスケープ」(註36)『風景の事典』59-61頁。)
- 50 西田正憲、前掲書、236頁。
- 51 柴田陽弘編著『風景の研究』東京、慶應義塾大学出版会、2006年など参照。
- 52 オギュスタン・ベルク、中山元訳『風土学序説：文化をふたたび自然に、自然をふたたび文化に』東京、筑摩書房、2002年。